

## 「授業について考える」

2012年9月15日(土) 13:30~16:30

法政大学 市ヶ谷キャンパス 外濠校舎5階 S505 教室

### ◆話題提供

「考える授業とするために

—歴史資料の活用—」

根崎 光男

(法政大学人間環境学部教授)

「大教室授業と少人数授業」

田中 優子

(法政大学社会学部部長・教授)

「フィールド体験と比較の視点」

陣内 秀信

(法政大学デザイン工学部教授)

今日ご出席の先生方もそうでしょうけれども、授業を一体どういうふうにするかということについては、おそらくお一人おひとり、真剣に考えておられることだろうと思います。

私は教員になって20年余りになるのですが、毎年、前期セメスタや後期セメスタの前には、セメスタごとの授業の組立てや方法についていろいろ考えています。授業というものはなかなか思い通りにはいかないのですが、今日はこれまでの経験によって少しばかりお話をさせていただこうと思います。

ところで、私の専門は歴史学です。歴史学のなかでも、日本近世史を専攻しています。

### 担当科目

まず私が、今年度担当している科目について説明いたします。例年、同じような科目構成ではありますが、まず市ヶ谷基礎科目の日本史、これは2コマあります。それから、人間環境学部の専門科目として、「人間環境学への招待」、あるいは「基礎演習」、これは1年生の必修です。次に「日本環境史論」、これは講義形式で行なうものですが、多い時には400人くらいになることもありますし、通常でも200~300人くらいの学生が受講する授業です。

それから、私どもの学部では「研究会」と呼んでいますが、いわゆる「ゼミ」で、これは2コマあります。人間環境学部は学生が非常に多い関係で、ほとんどの教員は2つのゼミを担当しています。Aゼミ、Bゼミと呼んでいますが、Aゼミは卒論を書くゼミ。Bゼミの方は、卒論を書かなくても卒業ができるゼミになっています。

また「フィールド・スタディ」という、現地

### 話題提供

「考える授業とするために

—歴史資料の活用—」

根崎 光男

(法政大学人間環境学部教授)

ただ今、ご紹介いただきました根崎でございます。よろしく願いいたします。私が教員になったころは、新任教員の研修というものはまったくございませんでしたが、そうしたものがあってしかるべきだとは思っておりました。本日の講師についてですが、市ヶ谷の各学部には有能かつ適任の先生方が数多くいらっしゃいますので、ほかの先生方のほうがよかったのではないかと今でも考えております。そのような中で、なぜ私が声をかけられたかといいますと、多分、“人身御供”なのだと思います。FDセンターは、私ごときでは断れない組織ですので、お引き受けすることになりました。

学習があります。実は先週、私も一週間近くフィールド・スタディに行って参りました。私は、今回は伊豆・箱根・さいたま市が対象地域で、『歴史的環境の保全を考える』というテーマで実施いたしました。30名近くの学生を引率して現地で学習してくる授業ですので、途中何かあったら大変だということで準備をして行っただけなのですが、蜂に刺されるというアクシデントに遭いました。すぐ救急車を呼んで対応し、何事もなかったのよかったです。そのような授業もご紹介します。

それから、大学院でも「地域環境史研究」という科目を担当しています。少人数ではありますが、受講生が社会人ということもあって、学部の授業とは異なる組立てが必要になります。このように、授業はバリエーションに富んでいます。

## 授業＝生きた教養

さて、先ほど授業の組立てを毎年考えているということをお話したのですが、実はどのような授業をやっていったらいいのか、いつも悩むわけです。そして、いつも「大学の授業とは一体何か」という問題に突き当たります。おそらく先生方お一人おひとり、いろいろな思いがあって授業をされていると思いますが、私は授業とは学生が社会に出るための力を養うためのものなのではないかと思っています。そのため、さまざまな「生きた教養」を身につけ、やはり「考える」ということをさせなければいけないだろうと思っています。

高校までは、与えられた課題に対して向き合うということが中心になっていると思いますが、大学では自分で課題自体を見つけ、その解決に向けて取り組んでいく。こうした学びを通して「社会で活躍していくための人間力を養っていく」ということが大切です。生きていく上での力とも言えますが、そういうことを念頭に置きながら、授業をできるだけ学生に考えてもらう方向でやっているわけです。

次に、歴史の授業では歴史資料を使います。いろいろなテーマについて、“歴史資料からどのような歴史が創れるか”ということを考えてもらいます。学生のなかには、歴史というとどうしても暗記科目というイメージがあります。暗記ですから聞くだけということになるのですが、大学の授業では、“歴史学というものは創っていくものである”ということを知ってもらうため、多少サジェスションをしながら考えてもらうようにしています。もちろん、その前提として「この資料にはこういう時代的背景があって、こういう内容である」という、それまでに学んだ歴史の知識を越える内容を話しておきます。

そして、“考えをまとめ、発表し合う”ということについてですが、大教室とゼミとはやり方が必然的に変わってきます。大規模の教室のなかで考えをまとめて発表してもらうということは到底できません。しかし、考えをまとめてノートに書くということをやってもらいます。そうは言っても、あまり時間的余裕はないのですが、与えられた歴史資料からどういう歴史が見出せるかということについては、とにかく気付いたことをメモさせるということが重要であると考えています。

一方ゼミでは、大教室ではできない感想・意見の表明を積極的に行ってもらいます。ここでは、「自己のレベルを知る」ということ、「他者の考えを知る」ということ、そしてそれぞれの学生の考えを認識することによって「相互に高め合う」ことを目的としています。とにかく何でも考えたことをまとめ、メモすることを心がけ、その発表によってほかの人の考え方も合わせて知っていくということがとりわけ重要であるように思います。

## 授業の心がけ

次に、私自身が授業のなかで心がけていることを話しておきたいと思います。先生方も経験があるでしょうが、私も学生時代に“よく聞い

ていてもなかなかわかりにくい”内容の授業がありました。そうした授業は、必ずしも中身が難しいというわけではありません。教員が自分の世界で授業をしているだけで、学生と向き合おうとせず、理解してもらおうという意識が希薄であることが多かったように思います。ましてや、学生のなかには高校時代に世界史が必修であったために、日本史を履修していない学生がかなりいます。半数ほどは日本史を履修していないのではないのでしょうか。このため、大学の歴史学では高校日本史のレベルを前提にしても無理なのです。ですから、授業のなかでは高校で日本史を履修していなくとも、レベルを下げるというのではなく、学生が理解できる題材を選んで講義を組み立てる必要がでてくるわけです。それでもわからない学生については、歴史辞典を引いて調べるようにと指導しています。

2つ目に心がけているのは、先ほども述べましたように「考えさせる」ということです。考えさせるときに、現物資料をできるだけ使っていきます。この現物資料というのは、古文書や絵図、そして絵画資料などです。ほかにも、視覚的な刺激として、映像資料を使ったりすることもあります。

3つ目として、最新の研究成果を紹介することです。高校日本史を履修した学生は、ある程度の知識はあります。しかし、高校の授業で習った内容を誤解していたり、理解が足りていない学生もいます。ましてや、いくつかの説があっても、教科書では断定的に記述されていることが多く、それを丸暗記していることが多いわけです。私たちもそうだったのですが、高校の時に習ったことが、今では“歴史事実の誤謬”、“歴史評価の間違い”、“歴史用語の変化”など、訂正されていることがいくつもあります。

そういうことを含めて、たとえば一つの歴史的な事象を説明する場合でも、この歴史事象についてはいくつかの説があり、必ずしも答えは一つではないということもわかってもらいたい

ので、最新の研究成果を紹介しています。これに関連して、4つ目として歴史研究が日々進展し、その結果として多くの成果が出版されていることを知ってもらうために、最新の参考文献も積極的に紹介しています。

5つ目は、歴史学の授業ですので、ゼミなどの少ない人数の場合には歴史史跡の現場を廻り、その立地や意味合いなどを考えられるように配慮しています。法政大学の周辺だけでも、かなりの歴史的な遺物、遺跡がありますので、90分の授業時間で精一杯廻ってきます。年間、ゼミのなかで2～3回実施しています。

このような形で、現存する史跡の現場を見て、今まで何も気にせずに歩いてきた大学までの通学路にも、歴史的な遺跡・遺物がたくさんあることに気付いてもらいます。全く気にかけてこなかったものが、“こういう歴史的な意味合いのものだったのか”と、現在の都市との関連やその連続性を知ってもらうためにも、ゼミのなかでこの周辺を歴史探索することにしていきます。

もう一つの心がけとして、“授業で教員は何を教えるべきか”ということをかなり意識するのですが、学生からすれば、授業から“何を知ったか”“何を考えたか”という気付きやその情報量の質が重要なのではないのでしょうか。いくら教員が熱弁をふるったとしても、学生の耳に入ってこなければどうしようもありません。このため、学生が授業から何を学びとってくれたかということを意識しながら、授業を組み立てることを心がけています。

その際に、3つの「き」というものを意識しています。授業は学生とface to faceでやっていますので、学生の顔色がわかります。もちろん、何か説明したときに全員が授業でうなずいてくれるわけではありませんが、確実に数人の学生は何か新しい驚きがあった時には、うなずいてくれます。それで理解度の感触がわかります。まずは“なるほど!”という「うなずき」、次に“そうだったのか!”という「気づき」、さ

らに“びっくり!”という「驚き」、このような学生から発信される3つの「き」を敏感に感じながら、授業の工夫をしています。授業では90分間延々と喋り続けるということもあるのですが、先ほど話しましたように、授業のなかで学生が何を考え、また何を感じ取ってくれたかということが重要だと思いますので、このような感触のレベルを意識しながら、いくつかの歴史資料を提示していくことを常に心がけています。

## 授業時の説明事項

私が初回の授業で話している事柄も合わせて話させていただこうと思います。それは以下の6点です。

ガイダンスのなかでいろいろな話をされる先生がいらっしゃると思うのですが、やはり学生が一番気にしているのは、この授業の単位が取れるかどうか、これは多くの学生にとって、最大の関心事なのではないかと思います。そのため、1回目の授業で「試験の形式、成績の評価」の説明をします。試験形式、問題数、参照の有無などについてです。

次いで「前のセメスタの成績分布の公表」をします。受講者は全員同じではありませんが、単位取得の目安にはなるだろうと思っています。

3つめに、FDセンターが現在取り組んでいる「授業改善アンケート」の結果を公表しています。授業の出席率や理解度はもちろん、200～300人の授業ということになりますと、自由記述も100～200ありますから、これもほとんど公表しています。私の授業を好意的にみている学生の意見はあまり話さず、どちらかといえば一人でも辛口な意見を紹介するようにしています。それは私が留意事項として受け止め、授業改善の宣言の意味合いを込めているためでもあります。

なお、自由記述を有効に活用するのには、もう一つ理由があります。200～300の自由記述

には、確実に1つや2つは私語にかかわる意見があります。たとえば、“授業中にうるさい人がある”という記述があれば、これを紹介しながら「私語注意」を喚起します。すでに初回の授業で、“うるさいところには注意に行きます、どうしてもやまない場合には迷惑行為なので退出してもらいます”と私語注意についての話をしているのですが、どうしても大教室では私語をする学生がでてきます。長い時間にわたって私語をやめない学生がいると、注意に行きます。それでもまた私語をやめない学生には断固たる態度で臨みます。正直に話しますと、私は20年余りの教員生活のなかで、2組の学生を追出したことがあります。必ずしもいい方法だとは思っていませんが、真面目に取り組んでいる学生の迷惑にもなることなので、最終手段としてそういうことをやったことがあります。

おそらく先生方のなかにも“騒がしいな”と思いつつ、なかなか注意ができないという先生もいらっしゃるでしょうが、私は真面目に取り組もうとしている学生の権利を守ることを優先しています。

それから、学生に説明している受講時の心得について話したいと思います。いずれの学生にとっても、歴史学はそれまでに学んだことのあつたものです。誰しも知識一般には思い込みというものがあります。歴史学において、思い込みは禁物です。歴史を正しく理解していないというだけでなく、歴史をゆがめてしまう可能性もあります。そのような先入観はもたないようにしてもらいたいということです。素直に聞いてもらって、教員が必ずしも正確な情報を発信しているとは限らないので、批判的な眼差しで聞いて欲しいのです。そして質問があつたら、授業が終わったあとに聞きにきてほしいと話しています。このため、ほぼ毎回、質問者がいます。

それから、2回目以降は、学部のシラバスにも印刷されているのですが、毎回の授業のはじめに「今日の授業のテーマはこれです」、「こういうねらいで、本日の到達目標はこれです」と



いうことを示してから、授業をはじめようにしています。多くの学生はシラバスを確認して授業に臨んでいないと思われますので、改めて意識を持ってもらう意味で、テーマの説明とねらい、到達目標を確認しているわけです。

## 考える授業とするために

次に、考える授業とするために、実際にどういうことをやっているかということと話したいと思います。ここから、いくつか映像を使います。

まず、先ほど申し上げたことですが、あるテーマの歴史を講義するときに、映像機器を利用してそれに関連する現物の絵図や絵画資料を見せます。もちろん、これらの資料を見てもらう前提として講義をしていますから、ある程度そのテーマについての歴史がわかっている状態で、資料を見てもらいます。ここでは、当日の講義と提示した歴史資料とがどうリンクして、どのような歴史が創れるかということを考えてもらいます。

大教室の場合には、資料から考えられる歴史を想像してメモしてもらいます。しかしこの場合、発表してもらうわけにはいきませんので、教員から資料の内容や背景を説明し、これを歴史のなかにどのように位置づけたらいいのかということについて話していきます。このことで、教員が解説した内容と学生自身が考えて書いたメモとを比較し、歴史を創造することの大切さを気付いてもらえるように心がけています。

3番目として、ゼミの場合を話します。ここでは、資料を示して、考えてもらい、メモをしたうえで発表してもらいます。また、ゼミの他のメンバーからさまざまな意見を聞くことによって、それぞれの考え方や新しい発想をも知ることができますので、そういうことに気付いてもらいたいわけです。あとは、大教室の場合と同じようなことですが、教員の方で資料の内容や背景を説明し、歴史のなかに位置づけ、ゼミでは特に自分が書いたメモの内容をどのよう

なロジックで説明するかということも考えてもらうようにしています。

そういうことが社会に出た時にも役立つだろうと思いますので、単に物事を考えるというだけではなく、メモした事柄をどういうロジックで、それを全体としてどう説明していくかということをも身につけてもらいたいわけです。

## 江戸のゴミ問題を読みとる

### ①浮世絵の事例

私は人間環境学部にも所属し、「日本環境史論」という授業を担当しています。このなかで、「江戸のゴミ問題」というテーマを講義します。この授業のなかで、いくつかの資料を示すことがあります。その1つとして歌川広景という人物が描いた『妻恋ごみ坂の景』という錦絵を見せます。歌川広景の師匠は、大変著名な『東海道五十三次』を描いた歌川広重です。この広重は、『名所江戸百景』という大変綺麗な江戸の名所を何枚も描いています。これに対して、弟子の広景は『江戸名所道化尽』という、師匠が描いた『名所江戸百景』をパロディ化した絵を何枚も描いています。師匠の方は江戸の名所を綺麗に描いているわけですが、弟子の方は場所と同じでも江戸の醜い部分を絵画化しています。こういうお茶らけた絵の方が意外と江戸の庶民の現実を物語っている場合が多いのです。『妻恋ごみ坂の景』には坂が描かれていますが、これが「ごみ坂」という坂なのです。「ごみ坂」とは何か。一般的には、ゴミを不法に投棄している坂と理解できます。もちろん、「ごみ坂とは何か」という課題もあるのですが、それはさておき、この資料の「ごみ坂」と呼ばれる坂の下に便所が描かれていることに注目します。これは公衆便所です。江戸時代には、江戸の町にも公衆便所がいくつもあったのですが、弟子の広景は「江戸名所」として「ごみ坂」と「便所」を描いているわけです。便所に入っているのは旗本だと思われるのですが、その外側でかがんだ用人たちが鼻をつまんでいます。便所の内側

には落書きもあります。そしてこれはごみ坂というところ。つまり、名所には程遠い江戸の醜い光景がパロディとして描かれているというのが、この絵の真骨頂なのです。

このように、江戸の町には「ごみ坂」と呼ばれるところが何ヵ所もあり、公衆便所も何ヵ所も作られていました。こういう公衆便所は誰が作ったのかというと、幕府が作ったものではなく、江戸の周辺農民が自主的に作っているのです。ここの排泄物を村に持ち帰って農業肥料にするというシステムがあり、ある意味、物質が循環しているわけです。しかし、現代の感覚から言えば、必ずしも衛生的なことではありません。江戸の町というと、環境的に過大評価されすぎていると私は思っているのですが、現実の江戸の町を学生に知ってもらうように心がけています。また、広景の絵のもとになっているのが、葛飾北斎が描いた「北斎漫画」というもので、便所の場面はそれを完全に模倣したものでした。このようなことも含めて、1枚の浮世絵から、人間が排泄したものをどう処理するのか、あるいはゴミというものをどういうふう処理したのかということを考えてもらうようにしています。

## ②大名屋敷の事例

これは、文京区内の大名屋敷の一角を発掘した写真です。ここには大きな穴がいくつも掘られていた形跡が写っています。江戸の町人たちが出したゴミというのは、最終的には今の江東区の東京湾側のゴミ処分場まで運びだされたのですが、大名屋敷のゴミについて現在判明しているかぎりでは、屋敷内にゴミの最終処分場を造って処理していたのです。ゴミを埋めては、土に戻ったところをもう一回掘り返して穴を掘り、更にゴミを埋めていたわけです。深いものでは5～6メートルぐらいあり、屋敷の一角はゴミ穴だらけでした。大名、旗本、寺社のゴミ処理は、町人たちのものと必ずしも同じではありませんでした。それぞれの身分でゴミ処分の

在り方が違うということを知ってもらいたいと思って、この写真を見せています。

次の資料は、江戸の町人たちが出したゴミの処分場となった近世前期の永代島周辺の絵図です。東京湾へのゴミの処分は江戸時代からはじまり、現在に至るまで延々と継続されています。このことで、干潟が消滅する一方で、土地が造成されました。東京区部の生活の繁栄は、海の一部を犠牲にすることで成り立っていることを知ることができます。

こうして、さまざまな歴史資料を提示することによって、ゴミ処理の歴史を知り、このことで現在のゴミ問題を意識し、問題解決に向けて考えてもらいたいと思っています。

## 資料から読みとる多くのこと

これまでとまったく異なるテーマなのですが、次に享保年間の象の瓦版を見せます。江戸時代にも象が輸入されていたのですが、この歴史資料から、どのような歴史がわかるかを考えてもらいます。「江戸時代は鎖国の時代である」というのが、学生が知っている歴史事実です。鎖国という社会システムのもとでも、実はいろんなものが入ってきているということを知ってもらい、この象が何のためにやってきて、どのように利用されたのかということを通して、江戸時代という社会の特質を知ってもらうというのがねらいです。次の資料は、この象が天皇に謁見している絵画です。長崎から江戸に向かう道すがら、京都で天皇に会っているのです。天皇が象を見えるということ自体、現代の私たちからすれば何の不思議もないのですが、これは簡単なことではありませんでした。一般の武士でさえ、天皇に会うことがむずかしかった時代です。天皇に会うにはある格式が必要でしたが、象にもある格式を与えることによって会わせているのです。このように、この絵画は普通にながめてしまえば何でもないようなものですが、これから学びとれる歴史がたくさんあります。

次の資料は、飯田橋駅前に残る石垣の写真で

す。皆さんのなかにも、飯田橋駅を利用しているながら、この石垣をしっかりと見た人は少ないのではないかと思います。ですから、時間があるときには学生を引き連れて歩きます。なぜ、このような石垣が残っているのか、どのような意味があるのか、こういうときは実際に歩いてみるのが一番です。そうすると、駅と交番の間に何やら文字が刻まれた石が1つ横たわっているのに気がつきます。この文字から、この石垣はある大名が造ったということが分かります。江戸幕府から命じられて大名が造ったのです。これに関連して、幕末期に撮影された写真を見せると、この石垣は牛込門の石垣であったことがわかります。こういう形で実際に資料を使いながら、学生のレベルで考えられる、想像できる事柄をとにかく考えてもらって、いろいろな発見をしてもらいたいと思っています。

このように、「考える授業」とするためにさまざまな歴史資料を駆使して活用していることを話させていただきました。与えられた時間を超過してしまいましたので、報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 司会

根崎先生、ありがとうございました。授業の目的、心がけ、3つの「き」への授業工夫、初回授業の説明内容、FD推進センターとしては嬉しい限り、学生授業改善アンケートの自由記述の活用といろいろお話いただきました。

私もつい聞き入ってしまい、時間コントロールを忘れて、ちょっと超過しておりますが引き続き行いたいと思います。

では、続きまして「大教室授業と少人数授業」と題しまして、社会学部長でいらっしゃいます田中優子先生、よろしくお願いいたします。

## 話題提供

### 「大教室授業と少人数授業」

田中 優子

(法政大学社会学部長・教授)

## 授業のやり方——文字資料・映像資料

社会学部の田中優子です。よろしくお願いします。今日私が配布したものは、文字資料だけです。実は授業のやり方そのものがこのようになっていまして、学生には文字資料だけ配布しています。そして教室で映像を見せています。文字資料が膨大なものであるということも一つの理由です。文字資料はその場で配るということをずっとやっていましたが、人数が多いと、これまた大変で、資料そのものが多いのにまた人数が多い。コピーするだけで非常に負担だったのですが、最近では授業支援システムの中に配布資料をあらかじめ入れておくことができます。みなさんもお使いだと思いますが、PDFでもWordでも入れることができますので、入れておいて次回は何番目の資料を自分でプリントアウトしてくるようになって、毎回資料を作って配布資料にしています。

教科書を使うこともありますけれども、基本的に教科書は使いません。なぜかという、教科書を指定しても買ってくれないからです。それよりも、大量の資料を配布した方がみんな試験のために必ず見てくれます。配布資料と映像資料は、それぞれ片方だけ参照しても意味が分からないわけです。教室に来て映像だけ見ても意味がわからない。教室に来ないで、出席しないで文字だけ見ても、意味がわからない。そういう方法にして、出席に誘導しています。けれども4年生になりますとみなさんご存知のように出席できない学生がでてきます。そうすると試験が受けられないことになります。しかし、授業支援システムに配布資料だけでも入れておけば、自習ができます。ですから大量

の文字資料をちゃんと自分で勉強しなさいと言っておいて、試験が受けられるようにするというのも一つのねらいです。ですから、その文字資料と映像を別々にしているという実際の授業と同じことをしているわけです。

## 大教室授業と少人数授業を区別する

では、今日のテーマの「大教室授業と少人数授業」というのは一体なんのことかと言いますと、この二つをちゃんと区別するということが大事だと私は思っています。

全く機能が違う、意味が違うのです。ですから、完全にこの二つを類別して、全く違うやり方で進めるということをお勧めします。

もちろん、私が大学生時代には先生方はそういうことをしていらっしゃらなかったし、研究与教室での授業がそれほど大きく離れていたわけでもありません。しかし、先ほど理事がおっしゃったように、そして私の配布資料にも最初にそのことを書いておきましたように、現在の4年制大学の進学率は50%を超えています。私が入学した頃には17%ぐらいだったわけです。全く状況が違うのです。ですから、その変わった状況に合わせなければならぬ。そうしますと、学者を育てるわけではないという前提に立たなければなりません。私たちは一般市民を育てるわけです。ですから、普通に生活していく、あるいは、決してエリートではない人たちがさまざまな仕事を社会でしていくために、市民社会をキチンと送れるかどうか。その時に自分の頭で考えられるかどうかということの方が重大な問題ですので、そのような方向に導く授業を、そういう能力を育てる授業をするべきだと思っています。

## 少人数授業のメリット

少人数授業はあまり問題ありません。少人数授業については、2ページ目の最後に書きました。あまり問題はないからです。少人数授業というのは、メリットが非常に大きい。少人数で

あればあるほど、いい授業ができます。なぜかといいますと、一人ひとりの能力を伸ばすための授業です。ですから、その少人数授業を大教室授業と同じように学生たちの前で講義をするだけでは、これはあまりにももったいないのです。そして学生たちも自分の能力がどのように評価されていくのか。あるいはその評価に従って自分は今何をしなければならないのか、それを知りたがっています。かなり強く知りたがっています。ですから、それに応えるためには、たとえばプレゼンテーション能力を育てるのだったら、プレゼンテーションをしているその場ですぐに言わなければなりませんし、文章力を育てるためには、文章を出したら即座に添削して返してやらなければならない。

少人数授業の時には、スピードが大事です。“そのうちね”というわけにはいかないのです。これはゼミでも同じことだと思います。そうすることによって、そのときのその学生の能力とちゃんと直面して指導してやる。これは非常に手間がかかります。たとえば20人くらいの文章実習ですと、一時は毎週文章を出していたことがあります。それを毎週添削するのは非常に大きな負担です。しょうがないので今は一回おきにしています。それでも大変大きな負担です。しかし、それをしなければ少人数授業の意味がありません。

今、私が言っている少人数授業というのは望ましいのは20人以下ですが、ある時点では25人でもいいかもしれません。だいたいそれぐらいの規模のことであって、それを超えると添削をしてやれないという意味で、あるいは一人ひとりの名前と顔を覚えられないという意味でも大教室授業と同じやり方でないと難しいだろうと思います。

問題は、大教室授業です。“大教室授業なんて無くせないのか”という、こういう議論はよく出まして、“できるだけ少人数にわけてやろうよ”とか、その方法はないだろうかと思いつつと模索していますが、不可能です。なぜかとい

いますと、確かに18歳人口は減っています。しかし、進学率が高くなってしまったわけですから、法政大学規模のところだと入学者の数はそれほど変わりません。ですから、大教室授業をしなければ、とてもやっていけないわけです。経営的にも無理です。それから、教室も回せないという状況ですので、これは避けられないのです。ですからどちらかという、大教室授業をどうやってうまくやっていくのか。学生の望むものに近付いていけるのかということを考えなければいけないと思っています。

## 大教室授業のメリット・デメリット

大教室授業にメリットはあるのかということ考えたわけですが、殆どないわけです。つまり、「デメリット」と書きましたが、大教室授業というのは講義を聞いているだけです。受け身になりますし、私語そして今では携帯でいろいろと見えています。教壇の上から見えても、携帯をいじっているという姿は頻繁に見られます。私語だけではありません。私語しなくて静かだからいいのかというところではなくて、別のことをやっているわけです。これも止めることはできません。ですから、こういう意味では大教室授業は学生にとってメリットはないし、自分を成長させる時間というふうにはなっていないことになります。

教員にとってなのですが、私も非常に手間暇をかけて資料や映像を作っています。いろいろな方法を考えます。膨大な量の採点を最後にするわけです。ところが学生の成長がなかなか望めないということになりますと、これもデメリットです。しかし、そのデメリットをメリットにする方法があります。それをいくつか書いておきました。

メリットの一つとしては、何の工夫をしなくても300名とか1000名という場合もありますが、一度にその人数の学生が学んで単位取得の可能性を確保できる。つまり効率的であるということです。これはもう避けようがないという

ことです。それからもう一つは、15回のまとまった講義を組み立てるわけですが、それを基に自分の研究や著書をすすめるということもできます。それなりに満足しますが、自己満足に陥りやすいということにもなります。

## 物理的条件の整備による可能性の拡大

この③以降は、(条件つき)ということを書いています。何かと申しますと、実は大教室授業というのはメリットがあまりなく、授業に失敗することも多いのですが、条件を満たせば、とてもいい授業ができるということなのです。みなさんも大教室授業、講義だけの授業をなさって、“ああ、聞いてもらえなかった”とか“失敗だな”とお思いになることがあると思います。でも、それは教師のせいばかりではありません。もちろん、自分で反省するということは私も度々ありますが、教師のせいだけではないということをご心にとめてください。これは条件が整っていないからなのです。ということは、いろいろな条件を大学に求めていく必要があります。今は様々な機材が出ていますので大学に求めていくことが可能になっています。たとえば、巧みな講義とか映像や音響をとまなう環境で学ぶことができるはず。これは映像や音楽に近い生活を送っている学生たちにとっては、興味を引く授業になります。理解しやすい授業になるはず。だからこそ、新しい発見が生まれる可能性があります。いい映像やいい音響を流す、そういう教室が必要になります。必ずしも法政大学の全ての教室がそうになっているということではありません。ここはとてもいい方ですが古い校舎に行ってみるとそうでもないし、多摩校舎でもいろいろな問題を抱えています。ですから、大学に求めていく一つのものとしては、映像や音響のいい条件の教室を作りたい。あるいは、古い建物であってもそういうものを入れて欲しいという要求をすることは大事な事だと思っています。壊れるとすぐ

に修理してもらおうとか、スピーカー換えてもらおうとか、とにかくちょっとしたことでもいいのです。そういうことを放っておかないということです。学生のためにいい条件をつくってやるということです。

それから、教員に意見を公表できる条件があれば、これも（条件つき）なのですが、同じ授業内容に対して、自分自身が感じたこと、理解したことと、他の学生が感じたこと、理解したことの違いを知ることができ、多様な意見と表現に接することができる。「教員に」というのは、「学生が」という意味です。“学生が教員に大教室の中で意見を表明することができれば”ということなのです。これは、できるかどうか考えてみる。極めて難しいです。「意見がある人、手を挙げてください」と言っても、大教室では手を挙げません。殆ど。でも、それだけのことはなくて、条件が整っていません。マイクがないです。学生はマイクを持っていない。マイクは教員が独占しています。これは考えてみれば変なことです。学生もマイクを持っていればいいはずですが。でも、300とか1000ぐらいのマイクを整えるのはすごく大変かもしれませんが、でもピンマイクぐらい、もしかしたら整えられるかもしれません。そうやって大教室の中で意見表明ができる条件を作りあげていくこともできるはずですが。そうしますと、教員は学生に対して「意見を述べてくれ」ということを言うことができる。お互いに大教室の中でやりとりがずっと楽になります。そうやって、大勢の中で意見表明をする機会があれば、その論理や表現力を磨く場になります。少人数教育より、大きな効果が上がります。つまり、ちょっと友達たちのような人の中で何かを言うのと、知らない学生たちが何百人もいる中で意見表明をしなければならない緊張感は全然違いますから。そういう緊張を与える必要があると思います。そういう意味で大教室授業とは、物的条件を満たせば様々な可能性があります。

## 現状と問題点

あとは、まとめてあるだけですが、スクリーンとか映像装置、あるいはいろいろと映像を使うにも問題があって、私が悩んでいることを今から実際にやってみます。たとえば、今映像が映っていて、「すみません、暗くしてください」と言わなければならないわけです。「暗くしてください」と。つまり、今はアシスタントの方がいらっしゃるので「暗くしてください」と言っていますが、実際には私が自分で暗くしなければならない。スイッチのところまで行って、あるいは、少しマシなところはテーブルの上で暗くできますが、とにかく教室が暗くなります。今、後ろの方だけ点けてくださっていますが、あまり光源が強くない教室だと、真っ暗にしなければなりません。真っ暗にしなければ映像が見えませんので暗くするわけです。そのようなことも一つ、割と大事なことです。暗くすると資料が見えなくなります。つまり私は映像資料と配布資料を別々に作っているのですが、映像資料を見ながら配布資料の文字を追って欲しいのに、それができないのです。という、悪条件の中でやっています。

## 映像資料の活用

映像資料なのですが、これは私の場合もいろいろと使っています。たとえば、これも歴史資料——歴史資料とは言えません——、穢多とは何かという、こういう割と微妙な問題などもやったりするのですが、この場合私は劇画を使います。劇画を使っていくときに、たとえばこれ、“皮をはぐ”穢多の階級の人たちが実際にはどのような思いをしながら毎日を過ごしているのかということを劇画で見せているわけですが、今ちょうど2コマになっていますけれども、こうやって1コマで映していることもあります。実はこの劇画を使う授業をやり始めた時に、劇画のこの1ページ分を取り入れて映しました。そうしたら、全く意味がわからない



のです。なぜかというとは劇画というのは、本で読む時にはちゃんと順番がなんとなくわかっていて、それに沿って私たちは読んでいるわけです。それを映像でやっても、読み方がわからなくなるのです。しょうがないので、小さなコマを1コマ1コマ取りだして、映像を作るという大変な作業をしました。しかし、そういうふうにすることによって、一つひとつの絵の持っている迫力が増し、そしてそういうものと——これは実際の絵巻の資料ですが——、歴史資料と一緒に扱うということが出来ます。

たとえば、一揆。これは歴史資料ですが、こちらは劇画の資料です。このようにして様々なその資料を、資料とそうでないものを混ぜ合わせて、現実には何が起こったのかを映像で見せていくということをします。これは劇画の絵です。こちらは実際の絵巻の資料です。この時には動画を見せました。映画を上映しました。そして最終的に講義をもとに本を作りました。カムイ伝を使ったので、『カムイ伝講義』という本を作りました。この本を作る時に、この講義を聞いていた学生に一部分書かせています。3分の1は学部の学生が書いています。本当はもっと大勢の学生と一緒に書きたかったのですが、書けない学生の方が多かったものですから、最終的に書いた学生は一人です。その学生は大学院へ進学して今博士論文を書いています。そういうふうにして授業の中で自分がやったことと、学生と一緒にやってきたことを本にまとめる。これは、大教室授業でできることのひとつだと思います。

今の事例は「比較文化論」ですが、文学の授業も何回か積み重ねた後で著書にしました。文学ですから、文字資料を使う、あるいは本や教科書を使うわけですが、その作品を読みながらシーンを思い浮かべている。では一体どういふシーンを思い浮かべることがこの文学により近づくことになるのかということを示すために様々な映像資料を文学でも使いました。

## 大教室における環境改善の必要性

今、お見せしたように映像資料は映像資料で見せているのですが、文字資料を読むことができないというそういう環境の中でやっています。これは学生からもいろいろと文句が来ます。「暗くなると読めない」と言っていますが、それを私は今、どうにもできないでいて、教室をなんとかして欲しいと思っています。あるいは教室によっては、たとえば、スクリーンが黒板の前に下がっています。そうすると、これは比較的黒板が広いですからこっちのスペースを使うことができますが、使えない場合があるのです。スクリーンを下ろしてしまうと黒板が使えない。そういう物理的な悪条件がさまざまあって、これを私たちは大学に要求しながら、良くしていく必要がある。

良くしていくことによって、大教室授業を活発にしていく。あるいはどうやって、どういうふうな大教室授業にしたいかというイメージを持つことによってむしろその物理的条件をそちらの方へ持っていくという努力ができるわけです。ですから是非、決してお一人お一人の努力だけで乗り越えると考えないで下さい。教員全体でこのことは乗り越えていくということになるわけなので、そういう要求は一緒にしていきたいと思っています。

## 授業支援システム等の活用

大教室授業と小規模授業の違いということを言ってきました。現在では、そういう様々なデメリット、悪条件があるのですが、2ページ目の真ん中のところにある「現状」というところに書いておきましたが、授業支援システムという非常にいいシステムがようやく出来上がって、先ほど言いましたように配布資料に工夫が加えられるようになりました。更に、授業支援システム上で授業についてのお知らせを載せるほか、ネット上で学生とやり取りができる。あるいは大教室授業に出ている学生ともメールで

やり取りができるということになってきました。それからシステムを使わなくても、リアクション・ペーパーを最後に書いてもらうという方法もやっています。その授業の回について書いてもらって、それを次の週までに全部読んで、そこからピックアップをして、そして“先週こういう質問がでた”ということで、その質問にこたえたりするわけです。そうすることによって、学生の方はどう感じるかというと、自分が質問したことに応えてくれていると感じるのです。全員はできません。時間配分が大変難しいです。いろいろと答えているうちに非常に長い時間経ってしまうので、リアクション・ペーパーに対するこたえが長すぎるというリアクション・ペーパーが出てきたりするということもあります。しかし、現状では、そのような方法もできますので、様々な工夫が可能だと思います。

## 教員同士の協力

私も今まで、迷いながらいろいろな方法を試してきましたが、“これでいい”思ったことは一度もありません。他の先生のやり方をよく訊きます。どうなさっているのでしょうかということを訊きます。学部によるとと思いますが、社会学部の場合は、教員が共有しているグループメールがありまして、“こういうことに困っているのだけれども、どうしていますか”と訊くと、ワーッとたくさんの返事が返ってくるのです。ですから、そのような教員同士の協力の仕方、つまり自分のやり方を秘密にしない。常に教えてもらう。それを取り入れる。そのようなことが、物理的な意味でも、大学全体の考え方、まさにFDなのですが、それを深めていくやり方だろうと思います。では、あまり長くお話できませんので、私からの問題提起はここまでにしたいと思います。ありがとうございました。

## 司会

田中先生、ありがとうございました。授業支

援システムの活用、それから大教室授業と少人数授業をしっかりと区別する、非常に重要なことだと思います。それから、映像資料と文字資料の活用等、お話をいただきました。

では、続きまして、「フィールド体験と比較の視点」という観点からデザイン工学部、陣内秀信先生に話題提供いただきたいと思います。では、陣内先生、センターへよろしく申し上げます。

### 話題提供

#### 「フィールド体験と比較の視点」

陣内 秀信

(法政大学デザイン工学部教授)

どうも、お二人の先生方のお話を伺えば伺うほど、自分はFDのこの推進にはどうも役に立ってない人間だと思わざるを得ないのですが、どういうふうなことをお話すれば、みなさんに多少でもお役に立てるのかと考えてみました。

## デザイン工学部の場合

私はデザイン工学部というところにいます。今のお二人の先生方が大きくみれば文系、私が理工系の建築学科というところにいます。したがって、だいたい授業、教育の在り方、学生の付き合いも違うわけです。ゼミといいますか、研究室というものがもっと重要になるという側面もありますし、大教室での300人、400人相手にした授業というのはございません。せいぜい150人ぐらいがマキシマムというところです。その中で、できるだけ学生諸君に、特に建築の場合はモノをつくる、設計だけではなくて現場でつくる、まちづくりというのもあります。

人と非常に関わるということもあります。社会と密接につながっているところもあります。そういうリアルな体験、そして創造的で革新的な知識といいますか、そういうものをいかに日常伝えていけるかというところに努力をしてい

ます。

今日のお話は「フィールド体験と比較の視点」というところで焦点を絞ってお話をしたいと思います。法政で私が教え始めて随分時間が経ちます。1976年の11月から非常勤で数年やって、そして80年代の初めくらいから専任になりました。授業を熱心にやっている最近の状況からいいますと、とんでもない話になってしまうわけですが、当時まだ自分も若かったこともありまして、非常勤で教え始めて学生を少し挑発しようということもあって、寺山修司が若者に発していた「書を捨てよ、町へ出よう」という有名なメッセージを私も引用し、これをもっぱら掲げまして、学生諸君と町に出て、実際にフィールドワークをやりながら建築を原点から考える。あるいは、身体で考えるということをやってきました。

今日の資料でお配りいただいたのですが、『実測術』という本を出しました。法政には1960年代半ばから70年代初めにデザイン・サーベイという大きなムーブメントがありました。宮脇壇という建築家が非常勤だったのですが、学生と一緒に全国の歴史的な町並み、集落などを調査し、近代建築・都市の批判に大変貢献しました。法政の学生諸君というのはグループワークといいますか、あるいはフィールドに入っていくって、力を発揮する素養といいますか、センスが非常にあると常々感じていました。

その良き伝統を私も継承して実際、歴史のアプローチで都市や建築を見るということを実践してきました。

私の研究室で学んだ高村雅彦さんという人が教授として活躍しているのですが、彼と3年生のフィールドワークを一緒にやっています。建築にとって、座学の授業はもちろん重要なのですが、設計製図と並んで、フィールドワークという演習が非常に重要な科目になっています。3年生のヤル気のある学生は殆どが取ります。東京を中心に、ともかくどこかへ行って——グループに分かれるのです。4人、5人ぐらいが

多いです——、面白い場所、建物、物件、何でもいいので探してきて、自分たちで交渉して、そこをヒアリングし、観察をし、実測し図面化する。あるいは文献史資料から歴史を読みとる。そして模型をつくる。そういう授業をやっています。いい物件を探しあてるといのは大変なのですが、これは非常に効果を発揮しています。

## 学生の演習・フィールドワークの事例

これは深川の本場の失われた材木商の地域です。古地図や古写真、引き取りから復元したなかなか面白い仕事をやってくれたグループです。やっていると本当にのめり込んで、徹夜ですごい大きな仕事をしてくれて、イキイキとこの作業やっていた様子が発表の段階でもよくわかりました。プレゼンテーションというのは非常に重要で、この模型も非常にリアリティがありました。どこかで是非、我々の研究グループの中での出版物に載せようと思っています。

ですから、こういうフィールドワークも研究ともつながってくるという回路もございます。

これは、麻布の六本木ヒルズとかあの辺に近いところですが、谷間にこのような庶民地区があるのです。寺に囲われた、麻布高校のそばですが、そこで見つけてきた長屋群です。昭和初期のこれを徹底的に彼らは中に入り込んで、4家族ぐらいのお宅の中を実測し、外観は全部実測して図面をつくり、模型をつくりました。更に、当然ですが、時代とともにライフスタイルは変わる、住み手も変化する。中を改造して住みやすくする。そういう住まい手の努力、工夫というものがどのように建築に現れたかということをやちゃんと考察する。これは当然、彼らにとって将来、企画したり設計したりつくったりという建築の仕事をしていく上で本当に役に立つはずで、同時に交渉力です。そして人々の間に入っていくって、こういう作業をしていくというリアルな経験が非常に重要になると考えています。

これは大規模な空間を実測した力作です。歌

舞伎座が今建て替え中ですが、そのちょっと銀座側、三原橋の元々川が流れていたのを戦後埋めて、そこの地下の空間を利用して大規模な再開発をして複合体をつくったところです。映画好きの方はシネパトスのある場所ということでご存知だと思います。これが今、取り壊される危機にあるのですが、モダニストの土浦亀城という建築家がつくった大変な傑作で、これを丸ごと実測して図面化して模型をつくったグループがありました。15ほどテナントが入ってまして、映画館3軒、飲み屋が5、6件、上にはまた大きな飲み屋があり、それ全部交渉して信頼を得て作業をしていくわけで、そのプロセス、エネルギーというのは、大変なものです。これ、みんなのめり込んで、本当に面白くチームワークよくやっていました。

チームワーク良くやるというのは、非常に重要で、一方の設計製図の演習というのは個人プレーです。ですから、このみんなでやるという大変重要な体験をしています。幸い、所有者と親しくなり、信頼も得て作品をまとめるというケースは多いのですが、そうすると模型をプレゼントします。都内のあちこちに今、そういう模型が点在しています。ここにも町会があり、展覧会をやってくれました。このように、50分の1という詳細な模型で、本当にいつどこに持っていったっていいような立派な模型をつくってくれました。

実はそのしばらく後で、私もお世話になったところに行ってみようかと思いました。一柳という天ぷら屋があるのですが、そこに仲間と行ってみましたところ、なんと彼らがプレゼントしていった作品の図面集が神棚に飾ってありました。本当にビックリしました。嬉しくなりました。こうやって地元の人たちに信頼されて、成果が反映されている。都内のあちこちで本当に草の根的にやっているわけですが——迷惑をかけていることもあるかもしれません。調査公害というのもございますので——、それでオーナーの求めに応じて、特に活躍した3名の女性

たちと連休に行ったのです。そうしたらこのオーナーが大変喜んでくれて、私の分まで含めて全部タダで御馳走になってしまいました。是非行ってください。一柳というところです。銀座のサロンになっています。

## 比較の視点

私は、常々、比較の視点を入れようと思っています。授業でも知的な好奇心を自分の問題として考えてもらうのに、身近な点と比較することとは学生諸君にとって重要だと思うのです。己を知るためには、外からの目を見る。二つの地域、二つのフィールドをやりなさいと、先生にも先輩にも、研究の駆け出しの頃よく言われました。自分自身はヴェネツィア、イタリア地中海というエリアと江戸・東京、日本ということで、主にこの二つの極を研究しており、先ほど言いました高村さんが幸いアジアの第一人者になっているので、法政建築学科のこの歴史系は世界の建築都市、住宅のフィールドワークの分野でかなりアピールできていると思います。そうやって比較の視点を重視してやっています。

この左側はヴェネツィアと東京の比較なのですが、リアルト市場というのがあって、右側の日本橋と、非常に意味的にも構造的にも共通している点があります。魚のマーケットが中心にあり、背後には吉原の遊郭と同じようなヴェネツィアの遊郭があり、そして堺町、葺屋町の芝居町が生まれたのと同じように、リアルトの背後に16世紀に芝居小屋が2件生まれたのです。非常に意味的に似ている。近代になると、日本橋川という近代建築が登場する舞台になるわけですが、そこに渋沢栄一がヴェネツィア風の館を辰野金吾に設計させたのです。辰野金吾はヴェネツィアに2週間滞在していたことがありまして、そういう意味で近代の東京というのはヴェネツィアにあこがれるという面もございました。空間的には、小さなスケールを組み合わせてできた谷中とヴェネツィアのサン・ポーロ

地区は、稲荷とマリア像の祠の置かれ方にも似ている点がございます。

しかし、似ているこの路地なのですが、社会の仕組みや人間関係、あるいは空間の利用の仕組みが全然違うので、右側の月島は路地の上に私設植物園のように、このように植木をいっぱい並べて、半分自分の空間にしているわけです。左側のヴェネツィアのカステッロ地区は契約社会なので、一切路上には出せません。しかし、上はお互い示し合わせて、このように洗濯物を干す空間として利用している。全く違うのですが、共通したたくましく共有空間を生かしているということで、違いと共通性を比較しながら身近な問題として建築をつくっていく、或いは都市をつくっていくその創造力を人間の問題、コミュニティの問題、形の問題、機能の問題、構造の問題、全て考えながら、学習してもらおうと思っております。

## 比較文化論

これは講義科目、「西洋建築史」、「都市史」、それから「建築と文化」というのを持っているのですが、この「建築と文化」で——これは2年生を対象にしています。前期です。——、ここで様々な視点から、様々なテーマで建築の比較文化論というものを考えています。アジアも含めてです。日本の問題をどういうふうに捉えるかということで、たとえば宗教建築という回もあります。これはイタリアの中世都市を代表するシエナの大聖堂と向こう側に市役所が見えています。このように完全に人工空間の広場に面して大聖堂が建っている。一方、これは私も大好きな根津神社です。東大の裏の方にはございますが、こういう地形を利用して緑、山の中に包み込まれるように自然の条件を上手く生かしながら、そしてコミュニティがその下に広がっているということで、同じ宗教施設を比べてもこれほど大きな違いがあるのです。

庭園というの、比較文化の一番重要なテーマです。これはイタリア式庭園で斜面を利用し

ながらも人工的に空間を段々状に造成し、直線とか噴き上がる噴水、こちらは中庭型のイスラムのアルハンブラです。そして中国、蘇州の代表的な庭園。イスラムとも共通するし、日本とも共通するのですが、やはり軸線があって、グリッドに乗っかって、建築と外部空間が近い関係にあります。これは、日本にはたくさん庭園がありますが、江戸でいえば大名庭園。建築がむしろ鳴りを潜めて自然。しかし人工的に計画された自然で、この中に実際の空間の物語が、京都や中国の西湖や、東海道やいろんなものが盛り込まれて想像力を働かせている。

次に、広場や盛り場ですが、このようなイタリアの画家によって描かれた理想の都市の絵画空間かと思えば、こっちが日本の水辺に発達した都市のにぎわいの中心的広場の在り方です。このようにおおいに違う。

たとえば土地問題。建築と都市の関係。この辺は地図に大きく反映されます。ローマの地図なのですが、このように建物がビッシリしっかり描いてある。一方、江戸の切絵図には、敷地の輪郭線とその居住者、そして道、水路しか描いていない。これは本質を突いているわけです。そういうことを考えながら、日本の問題を探っていきいたいというふうに、学生と一緒に考えていこうと思っています。

この点、特に理系では重要なのですが、ゼミとか研究室というのは、実は日本にしかないのです。ヨーロッパにはありません。アメリカにもない。どうも訊いてみると、韓国や中国にもそっくり日本的なものはない。これ、大変な宝物なのです。先ほど、田中先生が大教室で行われた授業を工夫して出版物にするというお話がございましたが、私たちはゼミや研究室でやっている日常的な活動を本にしていこうということをやっているわけです。つまり、ヨーロッパなどでは、個人と先生なのです。そういうつながりです。横につながっていないのです。もちろん、ゼミとか飲み会もない。それは重荷と感じてしまうと、ネガティブなのですが、“非常に

有能なフレッシュな頭脳がいっぱいいる。いろんなプロジェクトグループができる” というふうに考えております。

これも、ずっとやっている東京の水の空間。地中海世界がフィールドなので、ある時期はこうのようにイスラム、アラブの世界、トルコも含めてまわっていきまして、この中から有難いことにちゃんと育って、一人はアラブの専門家になり、シリアに3年留学して、今、愛知産業大学の教員をやっております。もう一人、鹿児島県立短期大学にも教員になっている男がいます。イスラム専門家、幸い二人出ました。

## フィールドワーク

ずっと、アマルフィとか南イタリアも調査を最近やっているのですが、こうして実測というのは、スケール感、素材感、空間の身体感覚、それから人と直接接するということ。もちろん空気、その場所。これは本当に最近ネット社会でみんなバーチャルなことばかり言って情報がみんな平板になっている中で身体化しない。それをやはり建築を本当にリアルに感じてつくっていく。そういう立場の人間を育てる建築学科としては、このようなフィールドワークというのは本当に重要だということを、設計を専門にする人たちも言ってくれています。

毎年、1グループ一週間ぐらいですが、行って調査をいたします。そして必ず報告書を一年以内に作ります。その次の年に今度行ってプレゼントをします。地元の人たちと更に深く交流をするというふうに積み上げていくのです。できたら、それを数年溜めて本にしていく。今、スペインのアンダルシアの本作りをやっています。

## エコ地域デザイン研究所の活動

これはそういう建築学科を含めて、隣に都市環境デザイン工学科というのがあるのですが——そこにもやはり研究室があるのです。都市計画のプロの人たちが2～3人いまして——、建

築とそっちと6研究室が特に中心で、それと文系の先生方にもたくさん加わってもらって、9年前にエコ地域デザイン研究所というのをつくりました。我々、教育と研究というのは、やはりつながっているというふうに考えたいわけで、座学、日常の講義、演習とゼミ。というふうになっていくと、だんだん演習、ゼミは研究に近くなってくるのです。そこを全部有機的に繋げてダイナミックに教育の現場を活性化させていきたいと思っています。その中から、エコ地域デザイン研究所というものもつくられました。いろいろ成果をあげてきたのですが、一番確実に面白い動きができたのは、自治体の日野市と組んで連携事業というのをやりました。いろいろな自治体、市民、住民、地元の研究者と一緒にになってこのような本も作り、その中から学生で頭角を現すのが出てくるのです。絵がちょっと上手い人に描いてもらうのです。そうすると、みるみる能力が発揮されてきて、この氏家健太郎君というのは、大変すごい絵を描きまして、日野市のお抱え画家のようになりました。この大きいパンフレットのファンタスティックな歴史と現代、エコが重なったような非常に面白い絵を描いてくれるような逸材が出てきました。そこから学生諸君——学部学生も入っています。そして大学院生——が加わって、日野塾というのをみんなでやって、ワークショップ、地元の住民のヤル気のある方々と一緒にいろんなテーマで研究会をやり、フィールドワークをやり、観察会をやり、そして地図を作成して、今できました。この地図の挿絵は、またその後輩にあたる三橋慶侑君というのが描いてくれました。3ルート地図ができて、これを基にエコミュージアムみたいなことをみんなでやっていって、それは卒論のテーマになるのです。

我々、理工系の特徴なのかもしれませんが、ゼミ、研究室の活動、教育の活動が、幸い我々にとっては研究ともつながってきて、法政らしい自由な——私学の良さというものを私は強調



したいと思いますが——、チャレンジがない  
ろんな仕事を学生と一緒にやっていくという可  
能性がおおいにあるのではないかというように  
普段から思っています。以上です。どうもあり  
がとうございました。

## 司会

陣内先生ありがとうございました。フィール  
ドワークの重要性、プロセス、チームワーク、  
コミュニケーションを利用した活性化。それか  
ら比較の重要性。実際のゼミ、研究室等をコメ  
ントと豊富な資料で紹介いただきました。あり  
がとうございました。では、以上、3人の先生方、  
話題提供いただきました。